

沼津市若山牧水記念館

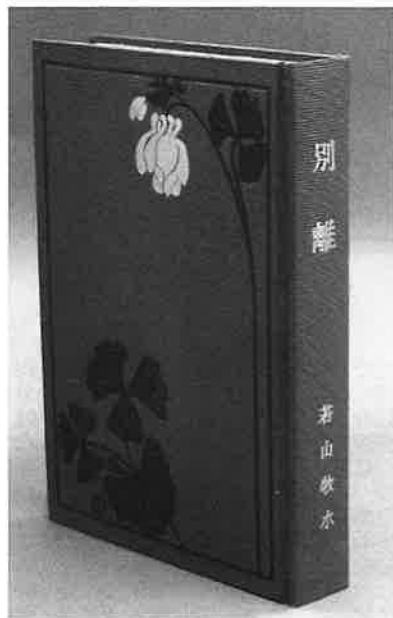
第47号

2011.9.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

若山牧水の歌集

第三歌集『別離』



春白昼はるまじろここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

歌集『別離』の最後の一首である。「旅に出て」と題する十三首中の一首。相模から伊豆へかけて歩いているが、ある意味では傷心の旅でもあった。出発が明治四十三年の一月五日。一月一日に名古屋の「八少女会」から第二歌集「独り歌へる」を発行したが、百五十部とも二百部とも言われる少数部数で、これぞ「我が短歌」と世に問おうと思つた意図は叶わな

いと知り、ふらふらと、家を出たのであろうと推測する。
『別離』は、第三歌集というものの、内容は、気負つて出して世に入れられなかつた第一歌集『海の声』（明治四十一年七月刊）と前記『独り歌へる』を併合、それに新作百三十三首を合わせた当時の牧水の集大成のような歌集であつた。

内容を精査すると、『海の声』から三百七十八首、『独り歌へる』から四百九十三首、それに新作を加えた千四首の大部な歌集であつた。『海の声』を主体とした明治三十七年四月から明治四十一年三月の作品四百十首を上巻とし、明治四十一年四月から明治四十三年一月までの五百九十四首の作品を下巻とする構成で、おおむね、上巻は愛の歌、下巻は失恋の歌と押さえてもよさそうに思う。下巻の冒頭の歌は、『独り歌へる』冒頭の

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや

である。なお、『海の声』四百七十五首中の九十七首、『独り歌へる』五百五十一首中の五十八首、合計百五十五首が削除されていることを付記しておく。

『別離』が世に喧伝され、一躍歌人として世に認められたのは、作品が当時の歌壇の主流であつた自然主義の流れから少し外れ、ロマンに満ち、情熱的であつたこと、それが、多くの青年たちに迎えられるのだから、もう一つ、明治四十三年一月から編集に取りかかつた詩歌雑誌『創作』（東雲堂書店）が三月一日に華々しく発行されたことによる。歌壇や詩壇の大家を網羅した『創作』は大いに支持され、編集者としての牧水の名も広く知られるところでの『別離』発刊（明治四十三年四月 東雲堂書店）であつた。

牧水は、自序の冒頭に、

廿歳頃より詠んだ歌の中から一千首を抜き、一卷に輯めて『別離』と名づけ、今度出版することにした、昨日までの自己に深く別れ去らうとするところに外ならぬ。

と書く。『別離』は園田小枝子との別れではなく、二十五歳の己の過去との別れだったので。
(須永秀生)

アップレ・ゲールの青年の恋

牧水の場合

松平 盟子

若山牧水は日露戦争後の明治四〇年（一九〇七）に文学者になることを決意した。いわばアップレ・ゲール世代の若者である。

アップレ・ゲールは、もともとは第一次世界大戦後のフランスの芸術文化に使われた言葉だが、日本では大正デモクラシーと戦後恐慌に揺れ動く中であつての享樂的な都市文化全般に対して使われた。

その意味からすれば、牧水の場合は時代が一つ廻ることになるが、日露戦争の勝利を帝都東京で迎え、早稲田大学英文科の学生として都市空間に身を置いた二十代前半の青年は、やはりアップレ・ゲール体験を心身に感受した世代といつていいと思う。

牧水は日露戦争が勃発した明治三十七年（一九〇四）、宮崎県から上京して早稲田大学文学科高等予科に入学し、北原白秋、土岐善麿といった文学を愛好する青年達と交わつた。明治四一年（一九〇八）七月に大学卒業。その一方で、医師であつた郷里の父が財産をなくし母は病床につくとといった悲劇（明治三十九年）や、園田小枝子との恋愛が深みに向かいやがて懊悩に突き進

むという青春の激情（明治四〇～四四年）を味わうことになる。このあたりはよく知られるところである。

こうした疾風怒濤の数年であつて、明治三九年（一九〇六）一月二日付、友人の鈴木財蔵宛てに書かれた手紙は興味深い。

若い時代、青春時代！ 今が花だからね。

自分なるだけこの時代に多くの印象を受けておかうと念つてをる、青年時代の回顧、それがたゞ真面目一方の学校生活ぢやあんまり花も咲くまいぢやないか！

……（中略）……

けふは日曜で、正午まで少し仕事があつた所へ例のミス日高が突然やつて来たので大にまごついた。昼からは芳水が来る、お蔭で、今夜は、素敵な夜更しをやつた、もう君一時十分すぎだよ、日高嬢とは久しぶりであつた、君の噂なども出て、よろしくとのことだつた、何でも近いうちマリエジするんぢやないかしら、そんな口調もほのめいてゐたよ、

「若い時代、青春時代」に「ユース、ユース」とルビを打つところ、また「ミス日高」「何でも近いうちマリエジするんぢやないかしら」といった口調は、英文科の学生らしい英単語の散りばめ方に弾むような高揚感がにじむ。

また翌年五月二七日付の鈴木宛書簡には、

ラブを求むるといふ文句が君の葉書の中にある、愚の至りだと思ふ、求めて得らるゝラブならば路傍の馬糞と何の選ぶところも無からうぢやないか。ラブはそんなお安いもんぢやなからうと思つてゐる。

とあつて、「ラブ」を繰り返して用いているのに気づく。先の「ユース」「マリエジ」とともに英語が身近な環境にあつてのやや得意気な心持ちが見えはするが、若者の洋風取りという以上に、明治初期に日本に導入された「恋愛」の概念がすでにすっかり定着していることを物語つていようと思う。

「恋愛」は「love」の訳語である。坪内逍遙の『当世書生気質』（明治一八年）では、主人公の書生・小町田と芸者・田の次の仲が小町田の



(日本近代文学館 提供)

友人によつて「余ツ程君を愛して居るぞ」と冷やかされている。逍遙はまた同書で「色事にも階級あり」として、恋を三段階に分けて説明する。

上の恋

意気相投じて相愛する
其人の韻気の高きと。其稟性の非凡なるとを。景慕するより起れる恋

中の恋

意気相合を主とせずして。まづ其色をめぐる
たゞ其皮相の毛並を愛して相交る

下の恋

肉体の快楽をバ。唯專一に主眼として。男女相慕ふ情をいふ 鳥獸の欲

これを見ると、「上の位」はより内面的、精神的な要素に価値が置かれ、「下の恋」は肉欲に発する快樂追求に位置づけられているのがわかる。

逍遙と同時代の北村透谷は、江戸時代の井原西鶴や近松門左衛門の作品をテキストとして

其情は初に肉情に起りたるにせよ、後に至て立派なる情愛にうつり、果は極て神聖なる恋愛に迄進みぬ

(「歌念仏」を讀みて「明治二五年」)

と論じた。「肉情」→「情愛」→「恋愛」という捉え方から理解されるのは、プラトニックな恋愛への過剰なまでの位置づけであり賛美である。これは当時の知識人たちが総じて共有する価値観だった。

牧水の場合もその延長にあつたといつていいのではないか。「ラブはそんなお安いもんぢやなからう」と嘆息混じりに書く彼の心の内には、これから始まるうかと予感する恋の端緒と、プラトニズムのもだえが感じられるのだ。牧水が透谷を読んだことがあつたかどうか寡聞にして知らないが、もしその有名な評論「厭世詩家と女性」(明治二五年)に目を通していたとしたら、冒頭「恋愛は人世の秘鑰なり」が島崎藤村に大きな刺戟を与えたように牧水の心にも響いたことだろう。

明治四〇年(一九〇七)春、上京した園田小枝子と牧水の交際が始まり、その年の終わりに二人は千葉県の根本海岸に投宿する。小枝子は実はすでに結婚し二人の子供まであつたらしいが、伊藤一彦の評論「運命の女―小枝子(上)」

(「牧水研究」第七号、皐脈社)によれば、上京後は「誓の学校」に通つていたようだ、という。牧水自身が小枝子の詳細を一切周囲に漏らさずにいたこともあつて実像は限られたところまでしか明かされないままだが、物憂わしげな美しい女性であつただけは確からしい。
そのような小枝子との恋を牧水は『海の声』(明治四一年七月)『独り歌へる』(明治四三年一月)でさまざまに詠みあげる。

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら死せ果てよいま

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海にとられむ

とこしへに逃ぐるか恋よとこしへにわれ若うして追はむ汝を

君よなどさは愁れたげの瞳して我がひとみ見るわれに死ねとや



第一歌集『海の声』



第二歌集『独り歌へる』

まず『海の声』から引いた四首について。
一首目の「ああ接吻」の初々しい感動は牧水にとつてそれがいかに鮮烈な体験であったかを物語る。と同時に、精神愛と肉欲との狭間にきわどく己を持する、そのひたすらな心情を表象する語として「接吻」はあつたのだろうか。『独り歌へる』の

野のおくの夜の停車場を出でしときつとこそ接吻をかはしてしかな
の「きす」のなんとロマンティックなこと。恋愛を「ラブ」と表記するプラトニズムへの希求と、それははつきり通い合う。

二首目から四首目までの歌には、小枝子を確實に己の掌中に収め得られないもどかしさが悲哀と薄暗い情念を伴い伝わってくる。牧水の一途な恋心を受けてそれに応えた小枝子がどのような本心を抱えていたのかわからないが、それを言い出せない苦悩もきつとあつたのだろうか。

次に『独り歌へる』から。

くちつけをいなめる人はやゝとほくはなれて窓に初夏の雲見る

わが妻はつひにうるはし夏たてば白き衣きてやゝ瘦せてけり

君がいふ恋のこゝろとわがおもふ恋のさかひの一すぢの河

鋭くもわかき女を賣めたりきかなしかりにしわがいのちかな

牧水の恋の歌にとつて「接吻」「くちつけ」はキーワードの一つだろう。歌集には「くちつけ」の六首前に

狭みどりのうすき衣をうち着せむくちつけはてゝ夢見るひとに

と、ほとんど晶子ばりの歌が見える。色彩感の鮮かさと甘美さは、「明星」初期の作風を彷彿とさせるのだ。

二首目以降では「わが妻」「君」「わかき女」と呼称を替えて小枝子を語り、微妙な感情の揺れを呼称にこめていく。牧水は少年時代に「明星」を購読したが、青年期には遠ざかったとされる。しかし私には内面化されて屈折を抱えた牧水の恋の歌は、たとえば三首目に引いた対句的表现などに晶子と案外近いところがあると感じられる。このあたりは機会があればさらに詳

細にさぐつてみたいところだ。

宮崎県から上京し、純朴さと一途さをもった牧水が日露戦争後のアプレ・ゲールの空気に浸りながら出会った激しい恋。それはたとえば同じころ新聞連載された夏目漱石の小説『三四郎』の小川三四郎にも似て「ストレイシープ」の悲哀を湛えている。牧水の恋の歌は、同時代の小説などとの対比からも検討されてもいいのではないか。



「筆者プロフィール」まつだいら めいこ

昭和二九年愛知県生れ。南山大学文学部国語国文学科卒業。

昭和五年、「帆」を張る父のやうに」で第二三回角川短歌賞、

平成三年、歌集『プラチナ・ブルース』で第一回河野愛子賞

を受賞。平成十年から一年間パリにおける与謝野晶子の足跡を研究するため、国際交流基金フェロシップを受けパリ第七大学に留学。歌誌『プチ★モンド』主宰。日本文芸家協会会員。歌集に『青夜』『たまゆら草紙』『うきはらし』『オビウム』『パリを抱きしめる』『カフェの木椅子が軋むまま』『天の砂』等。その他の著書に『文楽にアクセス』『母の愛と謝野晶子の童話』『親子で楽しむ短歌塾』などがある。平成二三年三月に開催した第三三回「雛の歌会」の講師。